

任意団体 地域が存続できる農業を目指したい。

仙台市

広瀬 剛史 ReRoots

取材日 2012.09.21

東日本大震災で川内コミュニティーセンターに避難したメンバーとともに2011年4月ReRootsを結成し、7月には仙台市若林区にReRoots若林ボランティアハウスをオープン。若林区の農業再生を目指して「復旧から復興へ、そして地域おこしへ」という中長期的コンセプトのもと、地域とのつながりや農家の目線を大事に活動している。

3月11日 14時46分

当時は寿司屋で働いていて、お昼ピークを終え一息ついている休憩中だった。携帯電話の緊急地震速報が鳴り出し、最初は何の音か分からず「なんだろう?」と思っていると、突然ものすごい揺れに襲われた。とっさに冷蔵庫や冷凍庫を押さえたが、手を払いのけるように激しく動き、扉が開いて寿司ネタが飛び出してくる。棚からはすし皿がどんどん落ちてきて、ロッカーが飛び上がった。このまま店の中には危ない。店長とアルバイトと3人で外へ逃げようとしたが、出口には棚がのしかかっていた。それを押しのけて外へ出ると、近所の人たちも慌てて出てきた。裸足で駆け出てきた人、悲鳴を上げている人、腰から崩れ落ちている人、みんな必死の顔をしている。目の前の高層マンションがちょうどL字型に建っているが、そのLの角にあたる連結部分が外れ、マンション同士がぶつかり合っていた。電信柱が揺れ、道路は波打ち、ブロック塀が崩れ落ちた。水道管が破裂したのか水が道路から噴水のように溢れ出してくる。揺れが落ち着くと、寿司屋の2階にある居酒屋に、逃げ遅れたお年寄りがいたので無我夢中で助けに向かった。割れた酒瓶などが散乱し、中はぐちゃぐちゃだった。お年寄りは歩くことができなかったので、背中におぶって急いで外に出た。近くのマンションの一室から火の手が上がり、煙が立ち昇るとともにサイレンの音が鳴り響いた。すぐに避難しなければならないと思い、店長とアルバイトは近くの小学校へ、私は仙台市青葉区川内にある自宅に戻り、ポリタンクやバケツ、お風呂に水を溜めてから、川内コミュニティーセンターへ避難した。そのとき家の玄関のドアは歪んで閉じることはできなくなっていた。川内コミュニティーセンターの近くには東北大学や保育園があり、学生や子どもたち、心配する親御さんやおばあちゃんたちなど、地域の住民が続々と避難してきた。体育館や和室などは人でいっぱいになり、夕方になるにつれて気温が下がる中、ラジオで沿岸部を



津波が襲ったことを知った。体育館では悲鳴が上がり、頭を抱え込む人、信じられないといった顔をする人、黙り込む人…呆然とする中でとっさに沿岸部にいる友人の顔が浮かぶ。だが、その時はまだ被害の全容が分からずにいた。翌日、新聞を読んで大変な状況になっていることを知った。

海岸の様子を見に

私は趣味で波乗りをするので海の様子が気になり、震災後4、5日目に自転車で15km離れた海岸を見に行った。その道のりで見た光景は、ショックで感情を表現することはできない。民家が流され、車が押しつぶされ、辺り一面瓦礫の山で覆われている。目に見える360度すべてが廃墟と化し、圧迫感が自分にのしかかってくる。足元は泥でネチャネチャしてまわりつき、にもかかわらず、乾いた埃が舞っていて空気がざらつく。火事の煤けた臭いやヘドロの変な臭いが混じり合って気持ちが悪い。上空を飛ぶヘリコプターのバリバリという音が耳をつんざく。五感すべてが生きているものを感じない。あまりにも悲惨な状況で自然に涙が出てきた。結局、海までたどり着く気持ちになれず、引き返した。

学生ボランティアとの出会い

地震発生から2～3日は、寿司屋で働いているアルバイトの安否確認や店の片付けなどを行っていた。私が川内コミュニティーセンターに避難したのは2日間ほどで、電気が復旧した後は自宅に戻った。初めのころ避難所は混乱していたが、町内会が指揮をとり始め、さらに10～20名の学生を中心に自然と運営ボランティアグループができあがりテキパキ動いていた。次第に、避難所で知り合った学生たちが、ボランティアの合間をみて私の家へ息抜きに来るようになった。

1週間後、川内コミュニティーセンターは別の避難所と統合されることになった。水道は止まっていたが、電気は復旧していて、プロパンガスを使用している世帯はガスが使えたので、統合された避難所へは移動せず自宅に戻る人が多かった。川内にはスーパーマーケットなど買い物をする場所がないため、自宅に戻っても食料がなく困っている人たちが大勢いた。まだ、ガソリンが手に入らず車で買い物に行くことができなかったのだ。そこで学生たちは川内コミュニティーセンターを物資の流通拠点にし、約300世帯に水や食料の配給を行なった。川内は青葉山の麓にあり坂が多いので食料や水を背負い、リヤカーに乗せて運んだ。ローテーションで体制を組み、配給は3月末まで続いた。3月下旬頃から、学生たちは空いている時間に何かしようと、津波被災地のボランティアに私と一緒に出かけるようになった。

支援活動の実情を見て

震災後、仙台市のボランティアセンターができてから、すぐに個人でボランティア登録をして活動に参加した。当初の仕事は避難所での名簿作りや物資運びだったが、徐々に泥出しや瓦礫撤去が多くなった。私は震災以前から三陸の海の問題や中国残留孤児の問題についてNPOやNGOでの活動経験があったため、ボランティア活動を行なうのは自然だった。しかし、参加してみるとボランティアセンターのさまざまな問題点が見えてきた。マッチングに時間がかかり、段取りが悪い。被災者は安否確認やこれからの生活をどうするかと大変な状況だったので、家の片付けまで手が回らない人たちがたくさんいた。でも、ボランティアセンターは片付けの依頼を受け付けてからでないと動かない。困っている人のところへ自分からはなかなか出かけなかった。現場で瓦礫撤去などの活動をすると、依頼を受けた場所を片付けてもその先が延々と続いている途方もない状況だった。依頼のあった現場近くでおばあちゃんが片付けをしている。「手伝うよ」と声をかけたいが、やっ

てはいけないルールになっていた。非常に制約が多く、改善点を見つけても上に確認する必要がある時間がかかる。今、近くで起きている問題をどうにかしようと自分たちで動く姿勢が欠けているように感じた。

さらに、作業時間は短い。9時にボランティアセンターの受付が始まり、マッチングで1時間から1時間半かかる。そこから現場に移動すると、作業はどうしても11時くらいからのスタートだ。1時間の作業をしたら休憩を取り、14時半に作業を終えて15時までにはボランティアセンターに戻らなければならない。あまり活動している実感がなかった。いくつものボランティアセンターを見たが、どこも同じ状況だった。

一方でいろいろな民間のボランティアグループも現場に入っていたので、その活動も見ていた。ボランティアグループは強い想いで動いているところが多く、スピードや行動力はとても素晴らしい。だが、物がなければ物資をあげる、瓦礫があれば撤去する、仮設住宅があればイベントをするなど、その瞬間は必要だが、どうしても目的的な支援にとらわれ、場当たりの活動をしているように思えた。また、自分が何かしたいという想いが強いので自分の側から活動内容や被災者を見てしまう。たとえば、泥だらけの家があって、瓦礫出しのボランティア依頼がある。しかし、震災前は瓦礫ではなく家財道具や思い出の品々だ。それを片付けて処分しなければならない当事者は、どうやってもマイナスからゼロには戻れない。どこかで気持ちをリセットし、無理やりゼロに戻してやり直さなければならない。ボランティアは、たしかに被災者から「ありがとう」と言われ、役に立つことができ良かったと思うけれど、それは復旧の一局面でしかない。そこに留まらずもっと被災者の側に立って、生活の立て直しという困難や心情に立って考え、そこでの支援の形をつくることはできないものかと考えた。



撮影：2012.6.23 仙台市若林区種次 畑の土起こし

私も避難をしたが、被災者の目線に立った時、これからの生活をどうやって立て直すかという点が一番の問題だ。生活を立て直すために目の前の瓦礫を撤去することは必要だが、それは第一歩であってそれで生活が立て直せるわけではない。市のボランティアセンターはトップダウンのお役所体質で上から目線に、ボランティアグループは自分の想い優先になりやすい。両者とも当事者目線が欠けていると感じた。

ReRoots（リルーツ）結成

仙台市は宮城野区と若林区の津波被害が非常に大きい。その特徴を見ると宮城野区北部は仙台新港があり工場地帯なので、大きな機械や化学製品も多く、一般ボランティアはなかなか入れない。宮城野区中部は、住宅地でサラリーマンが多い。そこで民家の瓦礫撤去や泥出しの依頼はたくさんあった。被災者は仮設住宅や民間アパートに避難したり、自宅を片付けて家に戻ったりして落ち着くと、元の職場に復帰し生活を立て直していく。ところが、宮城野区南部から若林区はずっと農地が続いていて、住民は農家が多い。たとえ瓦礫出しをして家をきれいにしても、職場である農地はまだ瓦礫の山で手が付けられていない状況だった。農地は農家の生活を支える重要な基盤なので、若林区の農地と農業に着目した。

2011年4月18日、避難所から一緒に活動してきた大学生たちとこれからの復旧、復興活動をしていくためにReRootsを結成した。団体のコンセプトや活動の原則は、若林区の特徴である農業と農家の目線に立って考えた。まずは、瓦礫撤去などの復旧支援が必要だ。また、家や機械、作業場、ビニールハウスが流されてしまった中で、営農再開するのは非常に難しい。復旧の次のステップは、農業を安定して継続できるようになるまでの復興支援が必要になる。さらに、農業は後継者不足などいろいろな問題を抱えているため、農業を活性化する地域おこしも必要だ。「復旧から復興へ、そして地域おこしへ」という中長期的コンセプトを固めた。

一方、いろいろなボランティアセンターやボランティアグループを見て、当事者目線であることが絶対に重要だと感じた。ReRootsでは①相手の立場、目線に立って支援をすることを活動理念に掲げている。また、被災者はもともと自分で生活していたし、生活する力を持っている。津波の被害を受けて一時的にボランティアを必要とする状況になっているだけだ。ボランティアだからと何でもやってあげるのではなく、あくまでも②農家が再び自分で農業をできるような力を引き出し、社会的地位と尊厳を確立できる支援を目指してい



撮影：2012.7.16 ボランティアハウス前 ReRoots1周年

く。さらに③彼らが立ち上がって初めて、ボランティアと協働で歩んでいけると考えている。これらはReRootsの大事な活動原則だ。

地元密着型の支援を

ReRootsを発足させたものの、学生中心の団体なので資金も人脈もなかった。4月下旬に知人を通じて若林区笹屋敷の農家を紹介していただき、GW明けから、毎週末にボランティアをするようになった。その頃は、畑の表面にある大きな瓦礫を重機などで撤去した後、まだ埋まっている瓦礫を掘り出したり、ビニールハウスの中に入った泥や瓦礫を除去したりする作業をしていた。

まだまだ農地の復旧は進んでいなかったが、驚くことに5月末には若林区のボランティアセンターは撤退してしまった。私たちはボランティアの活動拠点を つくるために農家の土地をお借りして、6月からボランティアハウスの準備を始めた。最初は更地で何もなかったのが、アウトドア用のキャンプトentを設置しただけだった。プレハブ、トイレ、一輪車、スコップ、倉庫、自転車などあらゆるものが必要だったので、あちこちに呼びかけをして活動に必要な資材を集めた。その甲斐あって、2011年7月16日、ReRoots若林ボランティアハウスをオープンすることができた。

農地の瓦礫撤去依頼は農家から直接ボランティアハウスに連絡がきたり、現場で声をかけられたりして受ける。これまで累計320件ほどの案件に取り組んだ（2012年9月21日現在）。ボランティアハウスをオープンした頃は知名度もないので、チラシを配り広報したが、その後は口コミで広がった。ある集落で畑の瓦礫撤去作業を行なえば、隣の農家から「うちもやってける」と依頼されどんどん広がっていった。ReRootsの取り組みでは、地域とのつながりや地元密着をととても大事にしている。いくら自分たちの掲げている理念を説明しようと、それだけで認めてはくれない

し、むしろ仕事ぶりを見て評価され、そこに人柄を見られる。「口ばかりだ」と言われないよう、朝9時から現場に入り長い時では夜7時まで活動をした。農家の方に「なんだお前らまだやってんのか。もう遅いから帰れ」と言われるまで瓦礫を取った。それでも「やりたくてやっているんです」と、自分たちが若林区の農業の復興を目指して取り組んでいることを話した。仕事ぶりは社会人だろうと学生だろうと関係ない。ボランティアだからと適当に済むわけではない。あくまでも基準は相手側にあり、農家から見て丁寧できちんとした作業だと評価されるかどうかが大変であって、自分たちがどれだけやっているかではないのだ。また、相手の気持ちをくみ取って作業をしないと信用してもらえない。このように評価されて初めて地元を受け入れていただき、根付くことができる。

さらに、震災以降、ボランティアハウスが建っている地区では子ども会や町内会などのすべてのイベントは中止になっていた。畑に行くと瓦礫撤去はするけれども、ボランティアハウス周辺の方々に受け入れられなければ存在できないし、地域との顔の見える関係も大事にしたい。その思いから映画上映会、芋煮会、ジャンボカステラ作りなど小さなイベントも開催している。何のイベントもなくなってしまった子どもたちにとって夏の映画会は大きな楽しみだ。学生スタッフみんなで話合っって子どもたちの喜ぶもの、学生ノリではない地域で受け入れられるものを考えた。子どもたちはボランティアハウスに遊びに来るようになった。

ReRoots ファームで農家のすごさを学ぶ

ボランティアは瓦礫撤去作業が終わればいなくなってしまうと一般的には認識されている。ReRoots は復興から地域おこしまでの活動を掲げているので、瓦礫撤去の先に見える農業と地域の姿を考えていくためにも農家の生活を学ぶ必要がある。そこで、農家をお願いして畑を貸してもらい2011年10月からReRoots ファームを始めた。農家と同じように畑を耕し作物を作る喜びや苦勞、体力的つらさなどを実感しなければ農家の気持ちは分からない。私たちは素人なので農家から育て方を教わり、地元の生活空間のなかで土をいじっている。すると、いつの間にか畑を見に来て、あとで「早く受粉しろ」とアドバイスをくれたり、漬物の漬け方や野菜のおいしい食べ方も教えてくれたりする。どの時期に何を植えばいいのかも農家の方が教えてくれるので、いろいろな種類の野菜を作ってみた。初めて植えた小松菜は鳥に食

べられてしまったし多くの失敗もするが、ReRoots ファームで農家の心づかいや生産に対するプロ意識を感じることができる。

みんなで瓦礫を取ってきれいにし、畑を借りて農家に教えてもらいながら野菜を作り、収穫して食べることができるのはとても感動だ。あんな瓦礫の山だったところからも野菜ができる。私たちのような素人でも瓦礫を取って一生懸命やればそれなりに野菜を味わうことができる。津波被害を受けた民家は多くの物を失ってしまい、マイナスからゼロには戻れない。しかし畑はマイナスからゼロへ、ゼロから作物の収穫というプラスへと確実に進むことができる。ボランティアも自分たちが瓦礫を取った畑で野菜が作られるのは嬉しいので、継続的にリピートしてくださる方も多い。ReRoots ファームは地元密着で農業を対象に活動していく私たちにとって欠かせないものだ。そこにいと、自然と向き合い、あれだけの被害を受け止め、それでも農業をやると覚悟を決めて、黙々と野菜を作っていく農家の姿はカッコいいし、彼らのプロ意識や野菜にかかる労力は素晴らしい。近くで見ている学生たちも農家をカッコいいと思うだけでなく、すごみを感じている人は多い。

しかし、昨年の行政のアンケート調査によると、個人営農で再開する農家は2割、集団化で再開したい農家は6割、残り2割は離農するという意向結果が出た。実際には現段階で集団化はまだ進んでいないので、もっと割合は低いだろう。離農した土地は耕作放棄地になりやすい問題がある。そこで、土地の活用方法としてReRoots ファームのほかに、市民農園の取り組みがある。1つは、荒浜の農家の方々と協力して開設した被災者向けの荒浜狐塚農園だ。仮設住宅などに避難しているとどうしても閉じこもりがちになってしまう。もともと土いじりをして生活していた人たちにとって、コンクリートばかりで野菜も作れないのではやりがいも持てない。そこで、畑に来て野菜を作れば天気や雑草が気になり、気持ちも外に向きや



撮影：2012.11.10 仙台市青葉区仙台北市 りるまあと オープン

すく閉じこもりがちにはならない。もう1つは三本塚の農家と協力して作った一般向けの市民農園だ。現在、この地域に来る人はボランティアか瓦礫撤去の業者、家や畑の片付けに来る住人に限られている。それ以外にも人が出入りできる仕組みを作る必要があると考えて位置づけた。瓦礫撤去はできないけれど、家庭菜園ならできるという人に来てほしいと思っている。人が入ってくればコミュニティ再生のきっかけになるし、土地の保全にもなる。今はまだ土質があまり良くないので、改良するために試行錯誤している。畑の土質を回復することも復旧の1つ。このやり方も農家から教わっている。

地域の課題と「ひまわりプロジェクト」

津波被災を受けた若林区東部地域が復興していくために抱える課題は①農業の再生、②コミュニティの再生、③景観の再生、そして④防災だ。防災については行政が担う分野が多いので農業、コミュニティ、景観の3つの側面を調査・研究してみた。

まず農業の再生について、行政は圃場を大規模化し、その後集団化さらには法人化、6次産業化して、競争力の高い農業を作っていく方針だ。おそらくいくつかの農家はその流れに乗っていくだろうが、成功するケースと難しいケースが出ると思う。日本の農家の平均年齢は65歳で、生産のプロだがマネジメントや営業販売は得意ではない。能力のある農家はやっていけると思うが、できない場合は借金を抱え込み農業をやめざるを得ない。一方、法人化することでそれ以外の兼業農家や高齢化した農家などの土地が集約されると、農業をする人そのものが減ってしまい、農業以外に仕事を見つけるようになる。すると土地から離れる人が増え、地域で取り組んでいた草刈りや掘はらいなどが行なわれなくなり、農業を維持していた集落の機能が失われていく。たとえいくつかの農業法人の経営は成り立っても、地域全体としての農業が衰退し、農村が成り立たなくなってしまう。営農形態の在り方は、農業経営だけでなく農業を土台に成り立っている若林区東部の未来にとってとても重要なテーマだ。

次にコミュニティの再生は、移転または元の場所で再建かなど、生活の礎となる家の問題について解決がないと先に進めない。沿岸部は危険区域に指定されているので、住民は移転を求められている。農業とコミュニティは密接であり、移転すれば通い農になり、そのような新しい農業方式になったとき集落として取り組んでいた農業の形を維持できるのかまだ見通せていない。また、通い



撮影：2012.8.15 仙台市若林区種次 ひまわりプロジェクト

農になることで農業を続けるかどうか問題となる。どこに移転するのか、元に戻るにしても若い人は来るのかなど、コミュニティを維持し、再建するには家を確保するだけでなく人と人の繋がりや公共施設の整備など生活空間を考えていくことが必要だ。そうした農業、人、生活、地域というトータルなコミュニティデザインを住民合意の中で形成していくことが求められている。

景観の再生はもともと生活していた住民の心象風景であり、農業に適した農村景観であり、豊かな若林区東部地域そのものだ。防風林、垣根、いぐね、花などが津波で流され、一面茶色でとても寂しい風景になってしまった。稲は潮風に弱いので防風林は大きな役割を担っており、いぐねもこの地域の屋敷林として文化的・歴史的にも価値がある。農村風景を取り戻すことは、農業に適した土地を取り戻すために重要な取り組みである。

そこでReRootsとして地域の景観形成のひとつとして「ひまわりプロジェクト」を行なった。仙台市は沿岸部を公園化する方針はあるがまだ具体化しておらず、海岸の防風林再生はとても時間がかかる。ひまわりは単年度で回転させられるし、見ると元気の出る花だ。ちょうど、ひまわりプロジェクトを計画していた時、福島県の「NPO法人シャロームの会」とつながることができた。シャロームの会は障がい者の自立事業の一環でひまわりの種から油を搾油して商品化する事業に取り組んでいた。残念なことに福島第一原発事故によりひまわりを植えることができないため、代わりにひまわりを育てて採取した種を送ってもらうという別の形の「ひまわりプロジェクト」に取り組んでいたのだ。こちらは景観目的でひまわりを植えたいし、シャロームの会はひまわりを育ててくれる里親を探していたので、お互いに協力することとなった。趣旨に賛同してくださった農家から畑をお借りして荒浜地区と二木地区に合計約2万本のひまわりを植えた。そして、夏、見事にひまわりの花は咲いた。住民からは「ぜひ、来年もやってほしい」との言葉を頂いた。

相手の立場に立つ視点

2012年3月～9月の間、毎月約1,500～2,000人のボランティアが参加し、ボランティアハウスオープン以来、累計約1万6千人の方々に来てくださった（2012年9月21日現在）。週末はバスツアー、企業の研修ツアー、市民グループ、学生サークルなど日本全国から訪れる。また、小学生も受け入れているので、親子連れの参加者も多い。ボランティア保険天災型にさえ加入していれば、いつでも参加できる。ボランティアに来る人たちには「少しでも地元の復興の力になれば」という謙虚な気持ちや姿勢で来ていただけるとありがたい。半日でも1日でも、その活動の積み重ねが復興へと進んでいくので、多くのボランティアにたすきをつないでほしい。

ボランティアの他に、ReRootsの仕組みや運営を学びたいと来る方も多し。ボランティア参加者でなくスタッフとして携わるのであれば、ボランティア理論やチーム理論などの学習、そして研究や改善など日々検証が求められる。そうした内容は他の団体でも参考になると思う。たとえば、ボランティアに参加する最初の興味や動機は人それぞれなので、その寄せ集めではチームはうまく動かない。そこで、ボランティア理論が必要とされる。ボランティアするには必ず対象が存在する。対象となる相手のことを理解しなければボランティアはできないし、相手の立場に立とうと努力することで謙虚に現実を学ぶことができる。自分の興味・関心を土台に、ボランティアする対象への理解が深まる過程で関心の払い方も変わり、視野が広がる。それは能力の大小ではなく人の資質に関わるものだと思う。相手の話を聞く力、それを整理し組み立てる力、まじめさや謙虚さ、我慢強さなど人柄が問われる。だから、自分の課題や欠点など見たくないところも見なくてはならない。そうして課題を前進させようとしたとき自分自身もまた成長していくことができる。ただし、自分が成長することが基準ではなく、あくまでもボランティアする対象が変化することが基準であって、その変化を追いかけていたらいつの間にか自分も成長していたという感覚に近い。こうして対象の変化を軸に据えることで、チームとしての判断基準がはっきりし、個々人の課題も明確になり、モチベーションの差や能力の大小ではなく、いかにして問題に近づけるか、対象の変化を促す媒介になれるかを研究していく。

ReRootsの活動を担っている学生たちの力はすごいと思う。最初は軽い感覚だが、理論をきちんと共有して各部署を担当し、農家の中に入り、ボランティアをしていく中で、だんだんと意識が変わっていく。たとえばバスツアーなどで来る40

人のボランティア参加者をコーディネートするので、責任感も強くなる。また農家の復興への思いを感じれば半端な気持ちは真剣さに変わる。最初は10人ほどだったReRootsメンバーも、現在は37人だ（2012年9月21日現在）。

地域が存続できる農業を目指したい

若林区東部地域の魅力は農業、食、自然、防災、星空だ。この要素を活かして人の出入りする仕組みを作りたい。これまで約1万6千人のボランティアが来ているので、これからは一度ボランティアで来た人が再び訪れ収穫祭などのイベントに参加するのもいいし、大学生の農業インターンや新規就農者を増やすファームステイの仕組みもあればいいと思っている。また、これから地域の復興している様子を外に発信したいので、野菜の販売をしていきたい。収益を目指す店舗ではなく、地域に還元する店舗づくりをしたい（2012年11月10日、仙台朝市に若林区復興支援ショップ「りるまあと」をオープン。毎週土曜日営業）。また、買った消費者がこの地域を訪れるような企画もしたいと考えている。

しかし、まだまだ途上だと感じている。畑に行けば瓦礫は片付いていないし、田んぼの除塩作業も来年まで続く。それが終われば大規模農場化の区画整理が始まり、それは3～5年はかかるだろう。本格営農再開はそれからだ。移転も実際に住むことができるのはまだ時間がかかる。それが済んだから、地域の再生、地域おこしの段階に進んでいく。これからやらなければならないことはたくさんある。ReRoots内部においても情報収集や体制整備、当事者との関係作りを丁寧に進めたい。行政のやり方でやればうまくいかないところもあると感じているが、ただ反対するだけではなく、どのようにして地元の人たちを媒介しながらコミュニティや農業形態を作っていくか、どうやって話し合いの場を作っていくか模索していきたい。まだ復興の形が見えないので、今後どのように地域を作っていくかの研究も必要だ。もちろんそれは地元の農家の方々と話し合いをして協働で進めていきたいと思っている。決めるのは住民だ。また、農業は生活の場であり、いつまでもボランティアは必要ではないと思うので、これからReRootsの農業部門を強化し、非営利の農業法人化も考えている。ただし、それは人材と技術、資金が必要なのでまだまだ構想段階だ。将来は新規就農者をどう増やすか、農村をどう保つか、農業が抱えている問題まで踏み込んで、地味で豊かな農村コミュニティとして存続し続ける農業の姿を目指したい。